

多気郡明和町

世古6号墳・池村城跡発掘調査報告

1982・3

明和町教育委員会

序

池村城址及び古墳について

池村城については從来余り人々に知られていませんが、南勢地区では大河内城や田丸城に匹敵する城ともいわれており、城主黒坂氏の一族が現在もそのまま続いております。

池村城址及び古墳群について三重大学歴史研究会原始古代史部会の方々の協力により、その発掘測量調査が行われ全容が解明されつつあることは、明和町の古代に興味と関心をもつ有識者の喜びとするところであります。昭和55年3月の発掘調査概報にひきつづき、完了報告結果がまとまりました。

この調査にあたりご協力いただいた各位に、衷心よりお礼申し上げます。

昭和57年3月

明和町教育委員会

教育長 永野由太郎

はしがき

三重県多気郡明和町池村地区の丘陵地に残る中世の山城は池村城跡と呼ばれるが、複数の郭部をもち、もともと周囲に壕が巡らされていた。築城は大永から天文の初期、国司北畠氏の家臣黒坂主計亮長兵衛が居城としたと伝えられ、この地方を支配した北畠氏の支城の一つである。

昭和52年、この城跡の一部が採土予定地にされたため、明和町教育委員会が主体となり発掘調査を行うことになった。発掘は翌昭和55年3月に始められ、斎宮跡調査事務所の指導のもと、三重大学原始古代史部会の学生諸君が担当した。当初は中世城館の遺構を明らかにする計画であったが、発掘の過程で当該地の小山が古墳であることが判明し、途中で急速古墳の調査に切りかえられた。

発掘の結果、二つの木棺跡が見い出され、玉城丘陵の多くの古墳と同様石室・石棺をもたないことが判明したが、築城時の削平などのため、形態など不明の点も多く残されている。また造営時期は出土した須恵器により6世紀後半から7世紀初めと推定される。当古墳はそれ自体としてはきわだった特徴を欠くが、玉城丘陵の縁辺に位置している点で、今後この地域の古墳時代末期の政治勢力のあり方を考察する手懸りを与えると思われる。また中世の山城が古墳を削平して築かれていることが明らかになった例としても貴重であろう。

最後に発掘と報告書作成に際し多忙な時間をさいて懇切な指導をいただいた県文化課並びに県斎宮跡調査事務所をはじめ、終始協力を惜しまれなかつた明和町教育委員会、および郷土の文化財保存に積極的に取り組んでおられる地元の方々に心からの謝意を表したい。

三重大学教育学部助教授

勝山清次

例　言

1. 本書は、昭和55年3月に明和町教育委員会が、国庫の補助を受けて行った世古6号墳及び池村城跡発掘調査報告書である。

2. 調査は次の体制で行った。

調査主体	明和町教育委員会
調査指導者	服部貞蔵（三重大学名誉教授）、 勝山清次（三重大学助教授）
調査指導	三重県教育委員会文化課、三重県 斎宮跡発掘調査事務所
調査担当	三重大学歴史研究会原始古代史部会 (小林剛、野田修久、江尻健、 岩脇彰、牛田光洋、前嶽敏文、増 地陽一、三浦儀直、中瀬充也、山 本哲史)

なお、発掘調査および測量調査について、宮崎寿君（三重大学学生）、横田正啓君（京都大学学生）の協力を得た。

3. 発掘後の遺物整理及び報文作成は、三重県教育委員会文化課、斎宮跡発掘調査事務所の指導のもとに、三重大学歴史研究会原始古代史部会が行った。

4. 発掘調査には、池村地区をはじめとした地元明和町の方々の協力を受けた。記して謝意を表したい。

目 次

I. 前 言	1
II. 位置と歴史的環境	3
III. 遺 構	
1 世古 6 号墳	5
2 池 村 城	8
IV. 遺 物	
1 古墳出土の遺物	10
2 鎌倉・室町時代の遺物	12
V. おわりに	13

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡地形図	3
第3図 世古 6 号墳遺構平面図	5
第4図 世古 6 号墳主体部実測図	7
第5図 池村城測量図	9
第6図 世古 6 号墳出土土器実測図	10
第7図 世古 6 号墳出土鉄器実測図	11
第8図 鎌倉・室町時代の遺物実測図	12

図 版 目 次

図版1 池村城跡・世古 6 号墳遠景、近景	
図版2 世古 6 号墳 第1主体部、第2主体部	
図版3 鉄器出土状況、主体部全景	
図版4 出土遺物 (世古 6 号墳出土土器)	
図版5 出土遺物 (世古 6 号墳出土鉄器、鎌倉・室町期の土器)	

I 前 言

○発掘調査に至る経過

昭和52年11月、池村城跡を含む地域一帯の土取りが、業者によって計画され、その施工計画が池村城跡の破壊を心配する地元住民から明和町教育委員会に連絡された。

明和町教育委員会は、これの取扱いについて業者並びに地元自治会と協議を重ね、今回の発掘調査の実施に至った。

なお、発掘調査は業者の協力により計画が延期され、昭和54年度の国庫補助事業として県教育委員会文化課、三重県斎宮跡発掘調査事務所、三重大学歴史研究会原始古代史部会の協力を受けて行われた。

○発掘調査の経過

3月5日に幅3mのトレシチ2本と、幅2mの十字トレシチ1本を設定し、それぞれA区・B区・C区と名称を与えた。

3月6日～11日に、A区とB区を発掘調査したが、A区からは羽笠片が出土したのみで遺構は全くなかった。B区も遺構・遺物ともに少なかったが、南端で黒色土があらわれ、その上層の赤土から薄手の土師皿や斐片が出土した。この黒色土を追求するためにトレシチを東に伸ばしたが約1mで黒色土は消えた。黒色土の中からは、遺物は出土しなかった。

C区の発掘調査は3月8日から開始した。南部の平坦地からは、遺構・遺物とともに検出されなかったが、北部の高台からは中世の土器片とともに須恵器片が多数出土し、なお掘り下げるに須恵器の杯や鉄刀片などがあらわれ、また、南北トレシチの中央やや南よりの東壁に、古墳主体部と思われる落ち込みが確認された。それで、C区は古墳の上に築城されているものであるとの判断を下し、この時点で古墳調査を発掘目的に加えた。

3月12日に、トレシチを中心にC区の発掘区を広げ、さらに掘り下げるに、3月15日に中世の土師質の皿がほぼ完形で、個体出土したので、いったんその面でそろえ、城としての遺構検出に努めたが確認されなかった。

さらに、3月20日に不明瞭ながら主体部と思われる土塙があらわれたので、その土塙を掘り下げ、3月24日に2基の木棺直葬の主体部を検出した。また主体部の中央部などにピットがあらわれ、その中から中世の土師質の土器片が出土したので、これらは中世以後における擾乱であると判断した。

また、C区に古墳が発見されたのに伴い、C区南東の台地状地形についても、古墳の上に土塙がつくられている可能性が生まれたので、十字トレシチを設けてD区とし、3月12日～15日に調

査したが、中世の薄手の土師器片が出土しただけで遺構は全く検出されなかった。従って、この部分は築城当時につくられた土塁であろうと判断した。ただ地元の人の話しによると、以前この台地状地形の裾部から鉄刀が出土したことである。

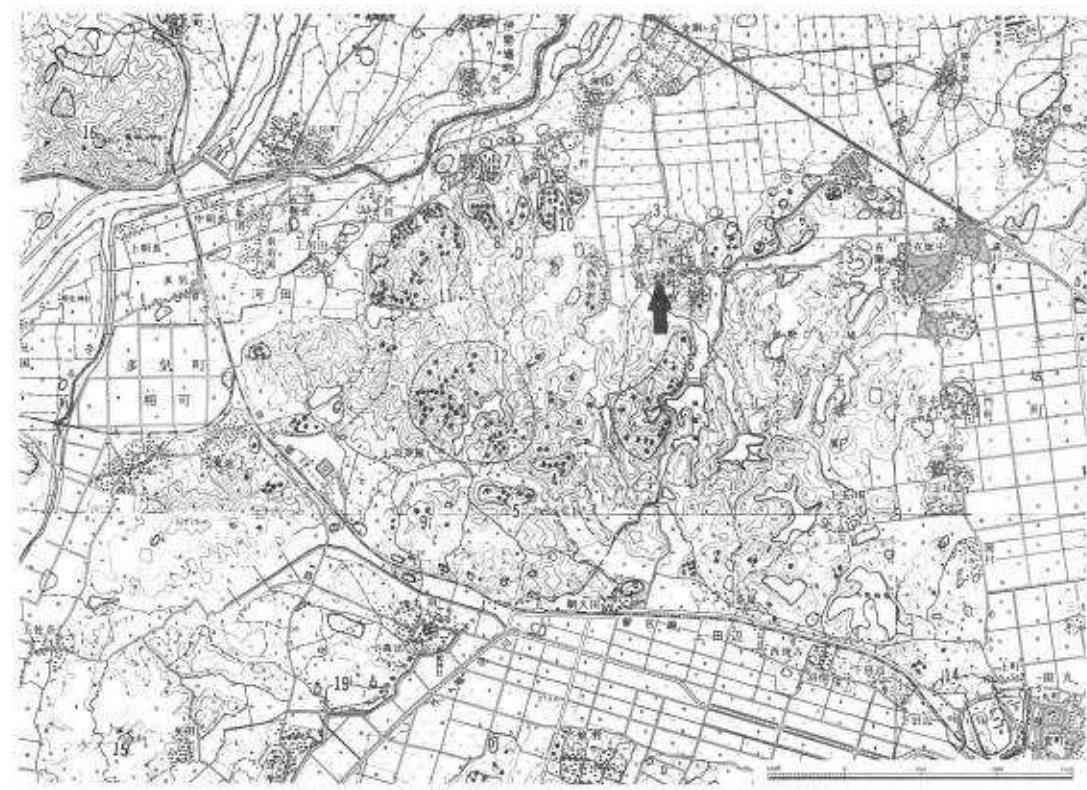
これらの発掘調査は3月31日に完了した。なお、写真撮影は3月27日～30日に行った。

○測量調査

発掘調査と並行して、池村城跡現存部全域の測量調査を行った。3月7日に絶対高を確定し、3月21日にトラバースを組み終えて、3月23日から測量を開始した。ただ、C区だけは発掘により著しく地形が変わるので、あらかじめ3月11日に測量を行った。発掘調査終了後も断続的に測量を行い6月20日に完了した。

なお、発掘区東方は土取りされているが、ここからも多数の土器片を表採した。採集したのは土師製の鍋、甕の口縁部片や、中世陶器の甕片、すり鉢片などで、この部分にも城の遺構があつたのではないかと考えられる。

また、池村城跡について地元の方々にも知っていたいただき、遺跡の保存に対する理解を深めもらうために、発掘調査中にパンフレットを作成して、東池村など遺跡周辺の住民に配布した。



第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000 國土地理院)

II 位置と歴史的環境

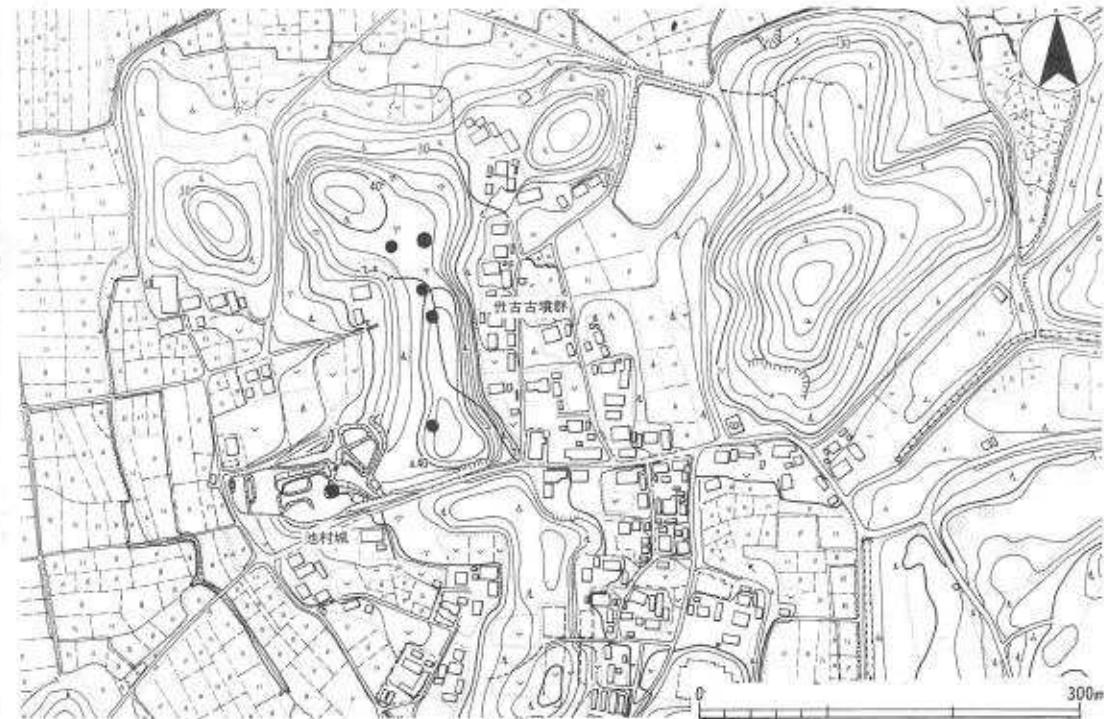
池村城跡は、南北に弧状に延びる伊勢平野の南部、松阪市から多気郡明和町にかけて、よく沖積地が形成された県下でも有数の穀倉地帯を見おろせる玉城丘陵の北部丘陵縁辺にある。

玉城丘陵の東には、楠田川とその支流である祓川が流れ、南には国鉄参宮線、北には旧国道23号線が通っている。これらに囲まれた玉城丘陵は、最も高い所で117.2m、平均して40～50mの半ば独立した山塊が狭い谷をはさんでかたまっている。行政区分では、多気郡明和町、同郡多気町及び度会郡玉城町の3町に広がっている。北の方は、概して傾斜がなだらかであり、南の方は急な傾斜をなしている。

そして、この玉城丘陵の北縁中央部に、東池村の集落と中池村の集落とを分けている、標高40mを越す独立丘陵がある。池村城址はその丘陵上に存在する。また、この丘陵には、世古古墳群として以前より5基の古墳が知られており、今回の発掘調査により確認された古墳も、この古墳群に属するものと考える。

次に玉城丘陵とその周辺の遺跡を時代別に概観してみることにする。

先土器時代の遺跡としては、大仏山南西の台地先端部に、約40×80mの散布面積をもつカリコ遺跡があり、大仏山丘陵より北方に張り出した形の明星台地北端部の明星古墳群からも、昭和46年の発掘調査により、ナイフ型石器・フレイク等が出土している。さらに、玉城丘陵から南方の



第2図 遺跡地形図 (1 : 6,000)

外城田川の氾濫平野へ向けて著しく突出する中位段丘の端部平坦面に、西世古遺跡がある。散布面積は約40×40mであり、カリコ遺跡とよく似た立地をしている。西世古遺跡から玉城丘陵南縁伝いに3km程西方には、平林遺跡がある。他に、三川遺跡、長津遺跡等がある。

縄文時代になると、早・晚期遺物を少量出した宮川左岸の大藪遺跡と、斎宮台地西縁で、中・後・晚期遺物及び土壙の確認された金剛坂遺跡がある。他に上村池遺跡があるが、この期の遺跡数は少ない。ともあれ、宮川、楠田川上・中流域及び外城田川上流が主な舞台であったと思われる。

弥生時代には、中期以降の方形周溝群の存在が判明している前記の金剛坂遺跡や大藪遺跡、中期の竪穴住居、後期の甕棺墓が出た古里遺跡がある。他には、北野遺跡・下尾遺跡があり、池村城跡周辺には、天王山遺跡（1）、城山遺跡（2）、世古遺跡（3）がある。この期については丘陵台地縁辺に遺跡が散在していることがわかる。

古墳の分布としては、玉城丘陵とその周辺は、三重県でも有数な古墳密集地であり、丘陵から段丘にかけて存在する古墳は、破壊されたものも合わせると約400基はあったものと思われる。斎宮台地西部には坂本古墳群・塚山古墳群・金剛坂古墳群・明星古墳群が連続して存在していた。玉城丘陵上には、大型古墳を中心とした古墳群が多く存在している。まず、前方後円墳を中心としたエブミ古墳群（4）、中山古墳群（5）、斎宮池古墳群（6）がある。これらは、丘陵全体の南部に集中している。帆立貝式古墳を中心とした神前山古墳群（7）、大塚古墳群（8）は、丘陵全体の北部に集中している。なお、神前山1号墳からは、画文帶神獣鏡が3面出土しており各地との同範関係も明らかになっている。他に、丘陵南方には方墳2基で構成されている権現山古墳群（9）があり、北方には大型円墳を中心とした天王山古墳群（10）がある。中・小規模の円墳からなる古墳群としては、丘陵北西に河田古墳群（11）、中央部に上村池古墳群（12）がある。他にも、数多くの小円墳が丘陵全体に存在しているが、これら古墳の立地には、何か政治的な意味合いが感じられる。

奈良・平安時代には、この丘陵の北方約2kmに、斎王（伊勢神宮の祭祀に奉仕する天皇家の未婚の女性）が住んでいた宮殿とその付属役所からなる斎宮跡があり、現在は国史跡として指定され、大規模な調査保存計画がたてられている。

城跡としては、池村城跡より東に有爾中城跡（13）、南東に田丸城跡（14）、南西に矢田城跡（15）、西に神山城跡（16）、北西に上村城跡（17）、岩内城跡（18）といったところが知られている。矢田城と神山城は、標高130m近い山頂部につくられた山城であり、他の城は平城または半山城である。

ところで、矢田城より約1.5km東には、現在40近くの郭を数え、平面規模480×350mを測る笠木館跡（19）があり、宋磁・天目茶碗・土師器片などが多数表採されている。

III 遺構

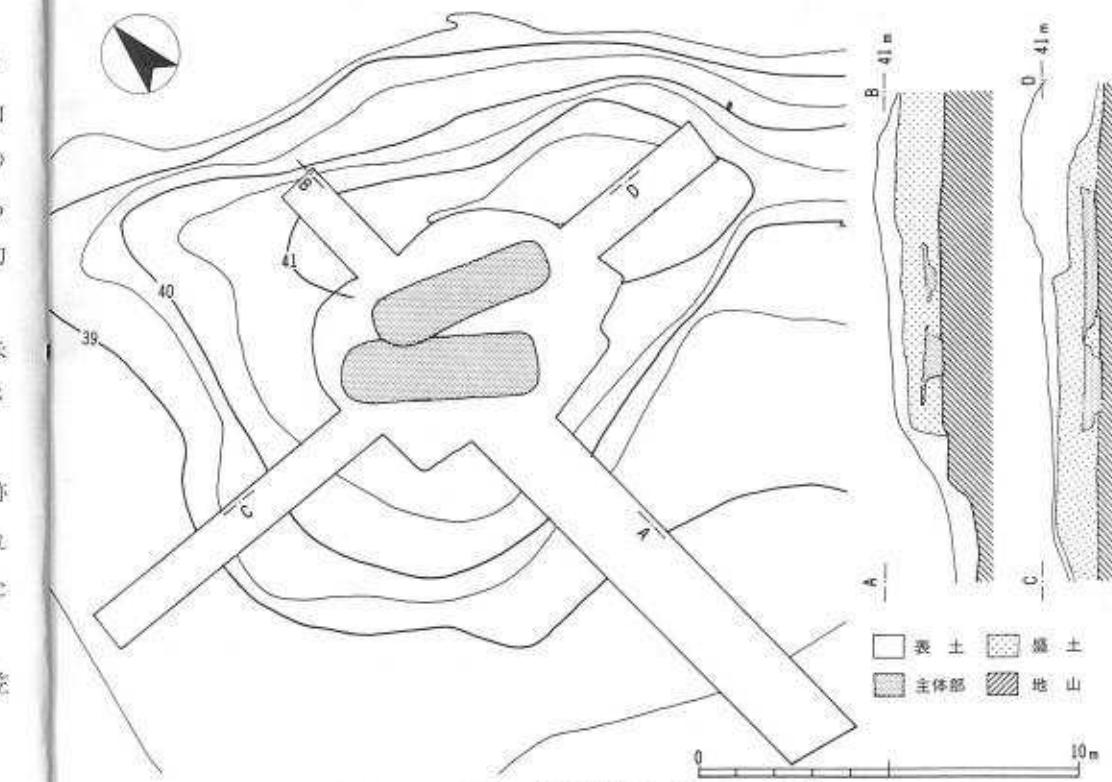
1. 世古6号墳

本墳は、池村城跡における櫓台かとも思われる部分の発掘調査中に発見された。発掘調査前段階での外観は、中央部が扁平な不整形な楕円状の高台であり、北側は比高約5mの崖に近い地形状況であったのに対し、南側は最近まで畑として人の手が加わっており、作物の貯蔵穴も掘られたりしていた。墳丘全体が城の一部にすっかり取り込まれていたということもあって、外観だけでは古墳としては認め難い状況であった。

○墳丘

頭初、山城に伴う遺構を検出しようと、東一西・南一北の十字トレンチを設定したが、その断面より墳丘封土状況が若干うかがえる。

まず、高台の西側部分は、墳丘そのものに後世の手が加わっておらず、現表土がそのまま墳丘表土となっていた。しかし、高台の中央部よりやや西側から、墳丘表土上にさらに堆積する層が見られ東に行くに従って段々に高くなっている。東端では瘤状に高くなっているが、この部分は完全に古墳時代のものではなく、黄褐色の砂質土が約1.6mの厚さで層をなしており、築城に伴う



第3図 世古6号墳遺構平面図（1/100）

盛り土であると思われる。そして現地表より約2mで地山面が現われるが、その地山面より0.6m上に、東に傾斜する厚さ0.1m程度の茶色の層が部分的に見られ、絶対的な高さから考えても、西側の墳丘表土面の続きであると考えられる。

南北方向の断面でも、瘤状に高まった北側では、やはり黄褐色の砂質土層があり、築城に伴って盛られたものであると推定できる。この盛り土は厚い所で0.8mほどであり、以下は赤褐色の墳丘封土がうかがえ、墳丘表土より m下方で内部主体が検出できた。

墳丘は、以上のように線的なものしかとらえることができず、基底線もはっきりしなかった。しかし、高台のほぼ中央部に於いて、地山から墳丘表土まで約2mを測ることができ、これをもって本墳の高さを示すことができる。

なお、南一北トレンチ・東一西トレンチとも、古墳の基底線を優に越えると思われる所まで延長したが、後世の人手が加わっている南側は勿論のこと、当時の姿を留めていると考えられる西側でさえも同溝の確認はできなかった。

○内部主体

木棺を直葬した内部主体が2基検出された。南側のそれを第1主体部、北側を第2主体部とする。第1主体部の長軸方向は、おおよそ北西—南東であり、第2主体部はそれより約20°反時計回りに振っている。

第2主体部西端部は、わずかに第1主体部を切っており、第2主体部造営に先行して第1主体部がつくられたことを示している。

木棺は酸性の赤土のために腐敗して消滅していたが、第1主体部についてはその痕跡が一部空洞になって残っていた。また、どちらの主体部も、墳丘封土に土塙を掘りその中に墓壙を掘っている。木棺痕は地山を少し掘り込んでいた。

第1主体：

長さ5.3m、幅1.7m、木棺痕の最深部まで0.6mを測る隅丸長方形の掘り方である。木棺痕は長さ4.2m、幅0.8~1.0mで、中央部から東側にかけては、やや不整形な部分もみられるが、東端約1mは空洞となっていた。

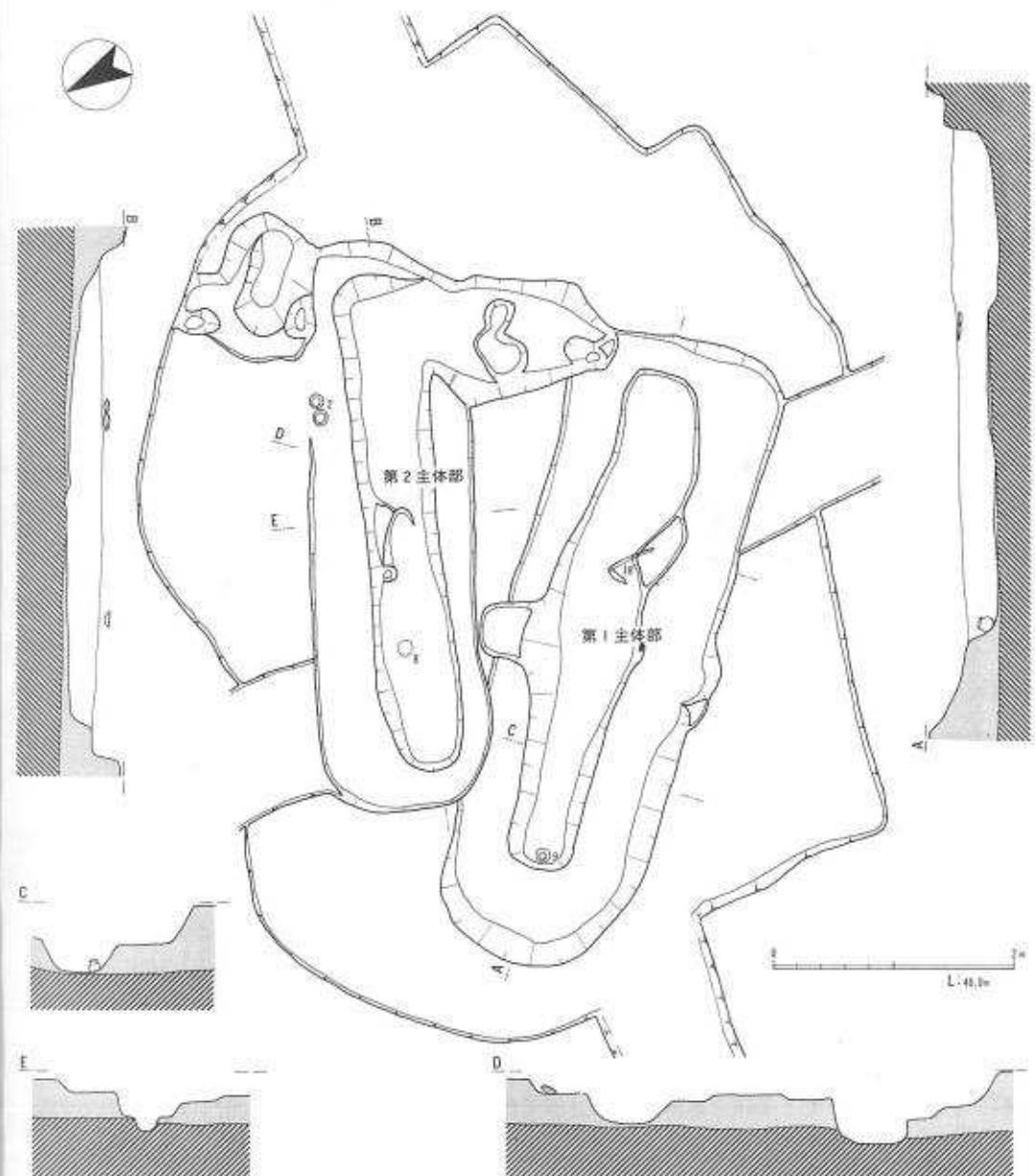
遺物としては、棺内西端に短頭壺（9）が完形で出土したほか、棺内中央から東部にかけて、鉄刀（18）、劍（13）等が出土した。しかし、鉄刀は折れ、劍はバラバラに割れた小片の状態で検出され、両方とも棺の上に置かれていたものが、棺の腐敗にともなって落ちたものとも考えられる。

第2主体：

長さ4.7m、幅1.4m、木棺痕の最深部まで0.4mを測り、第1主体部よりやや細長い感を与える掘り方である。東部は擾乱をうけはっきりしない。木棺痕は掘り方中央よりやや南側に位置し

ており、長さ4.1m、幅0.6mを測る。中央部やや西側にひと握りの粘土もみられた。

遺物としては、墓壙中央より1mほど西側で蓋（7）が出土し、東部擾乱跡のすぐ西側の棺外には身（1）（2）が並べて置かれていた。また、木棺痕北側壁面には、鐵儀（15）が貼り付いていたように出土し、東部擾乱跡には鐵刀片が数点ちらばっていた。



第4図 世古6号墳主体部実測図（1／60）

2. 池村城

池村城は、有爾中から池村の間に、ほぼ東西方向にひろがる低平な丘陵の西端部にあり、城の東端部を巾約5mの堀切によって、自然の丘陵から区画することにより、平山城としての範囲を定めている。

城は、土壘と9ヶ所の平坦地によって形成されている。城の北側は自然の崖となっているが、西側と南側は道の為一部削り取られているのではないかと思われる。

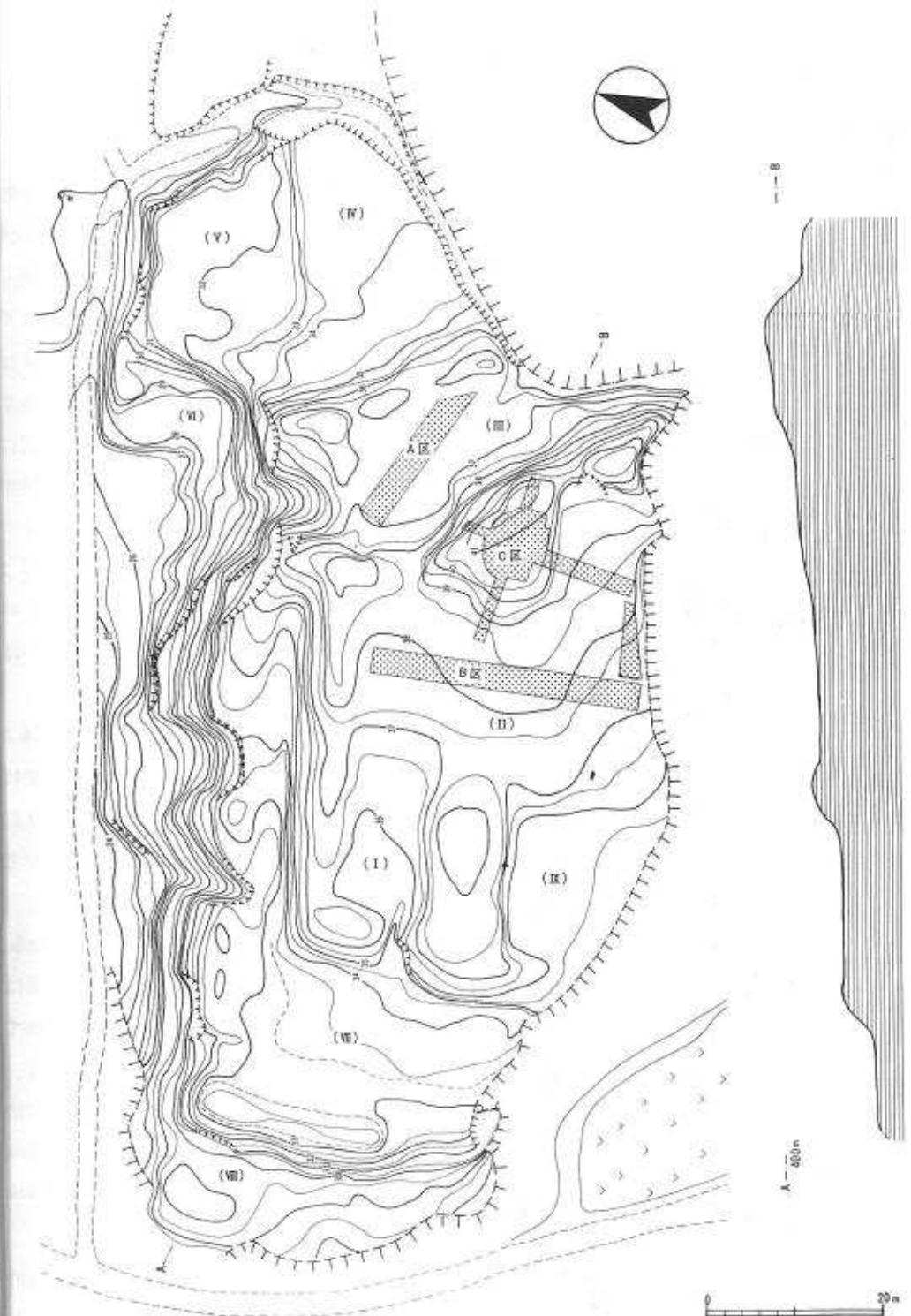
城の主郭と思われる部分【I】は、丘陵の西端近くに設けられ、北・西・南の三方を巾5~10m、高2~4mの土壘で囲まれた、約200m²の平坦地であり、土壘西側に、巾1.5m程度の狭い入り口を開けている。

主郭の東側には、南北に広がる、約560m²の平坦地【II】がある。この平坦地と主郭ととりまく土壘の上面とは、ほとんど比高差がない。従って、両者はお互いに連絡しあって、腰曲輪としての性格を有していたのではないかと考えられる。さらに、【II】の東側には、後期古墳をとりこんだ巾7~15m、高2~2.5mの土壘がある。この土壘の北側半分（とりこんだ古墳上）は、平坦に削られ、櫓かそれに類する物の跡ではないかと思われる。また、土壘の北端部には、北東の郭へ続く巾1m程度の狭い入り口が開いている。土壘の北東部には、約140m²の平坦地【III】があり、北と東を、巾4~10m、高0.5~1.0mの低い土壘で囲まれている。【III】の北東には二段に別れた郭がある。【III】と上の郭【IV】との比高差は3m程度あり、上の郭【IV】と下の郭【V】は、1.5mの比高差がある。これらの郭の北側は、自然の崖となっている。東端には、堀切があり、堀切の底から【V】までの高さは、約3.5mである。南西部は、土取りの為すでに破壊されており、不明である。また、下の郭【V】の西側には、約60m²の小さな平坦地【VI】があり、大走りではないかと思われる。

主郭の西側には、南北に広がる、約450m²の平坦地【VII】があり、その西端には巾3~4m、高0.75~1.0mの土壘がある。土壘の西は、約4mの崖となっている。また、この土壘は、的土居と呼ばれ、主郭への入り口を隠し守るという役割を持ち、土壘の南北両側から出撃できるようになっている。さらに、この主郭の西は、約320m²の平坦地【VIII】になっている。

主郭の南側は、主郭と同レベルの、約200m²の平坦地【IX】があり、その南端はすぐに崖になっている。

主郭の北側は、空堀が土壘に平行に走り、西側の平坦地【VII】と連絡しあって、腰曲輪としての働きをもなしていたと推測できる。この空堀の北側には、巾3~5m、高0.5~1.5mの東西に長くのびる土壘があり、土壘の北側は、自然の崖となっている。この北側斜面には、2本の縦堀が掘られ、敵が斜面に沿って東西に移動するのを防げている。

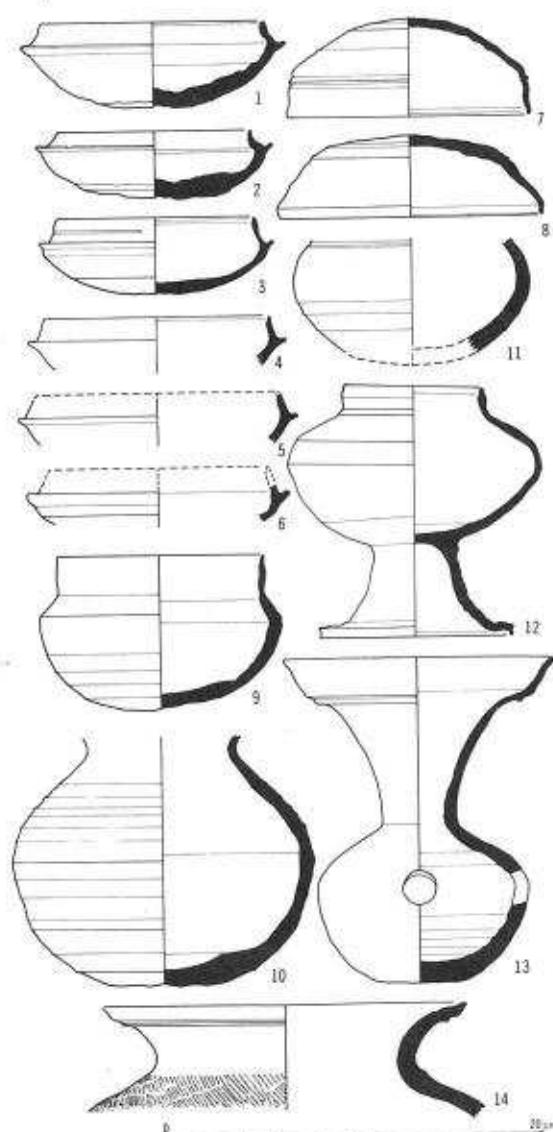


第5図 池村城測量図 (1:750)

IV 遺物

1. 古墳出土の遺物

杯身 (1~6) 口縁部径10.3~12.0cm、器高3.5~4.5cmで、立ちあがりは内傾し、その傾斜は1~3については大きい。1・2は肉厚で色も薄青い。底部はヘラ切りのままであり、あまり丁寧は整形はされていない。2にはヘラ切り痕が段状に残っている。3は明灰色で薄手に作っており、口縁部の立ちあがりもきつい。また、厚さも均一的である。ロクロ使いは、1・2は不明、3は左回りである。4~6は、口縁部のみで、しかも全径の $\frac{1}{2}$ 程度の残存状態である。4は



第6図 古墳出土の遺物 (1/4)

ナデで仕上げており、口縁端部内面にわずかに段が見られる。6は内面と受部周辺にナデの手法がみられ、わずかに残った体部には、ヘラ削りも見られる。

蓋 (7) 口縁部径12.9cm、器高5.2cm。天井部と口縁部の境の線は明瞭で、一重突起がめぐらされている。ロクロ使いは右回りで、焼成は良い。

蓋 (8) 口縁部径14.0cm、器高4.8cm。天井部と口縁部の境の稜線は明確ではない。全体に厚手で、天井部のヘラ切り整形もやや雑である。ロクロ使いは右回りで焼成もややあまい。

短頸壺 (9) ほぼ完形を保っている。口径11.0~11.3cm、器高8.2cm。口縁部は直線的に伸び、橢円球状の胴部へと続いている。内外面ともきれいに水挽きされて、なめらかである。内面底部には水挽きの跡が段になって残っている。胎土には、3mm程度の砂粒が混じっている。全体として焼成は良である。

壺 (10) 半分以上欠損しているために、長頸であったのか、短頸であったのか不明である。全体に厚手で、外側に文様は

ない。胎土のきめも細かく、焼成は良である。

台付短頸壺 (12) 最大径16.7~16.5cm、頸部最小径13.2cm器高13.5cmで、台の底辺部径よりも体部の径の方が大きい。台の接合は、まず体部をつくり、底部に台を接合し、接合部分には細長い粘土紐を巻いてすり消したあとがある。台に穿孔はない。胎土は1mm程の砂粒が混じり、焼成の時におきた器形のゆがみが、口縁部にあらわれている。

聰 (13) 器高17.2cm、口径14.5cm、胴部径11.4cmである。口縁部の $\frac{3}{4}$ を欠損しているが、重厚な作りである。内面はきれいに水挽きされているが、胎土は他の土器に比較して白っぽくもうろこ。焼成はあまい。

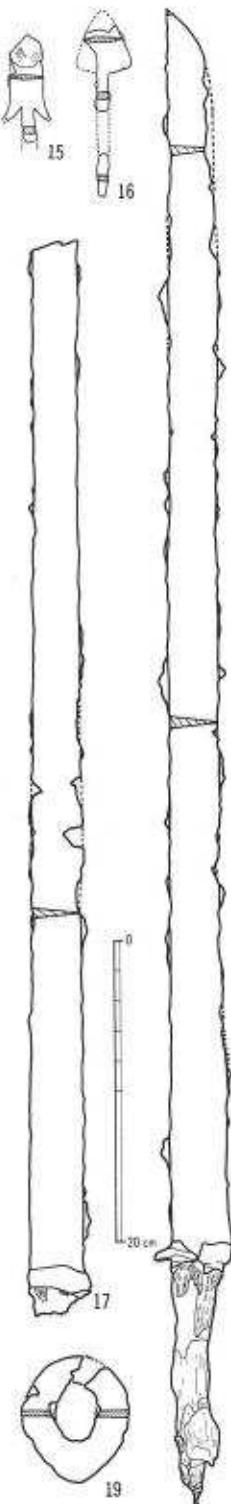
甕 (14) 口縁部の約半分しか残っていないが、口径約19cm程度のものである。口縁部は外側に大きくくびれ、かなり広口のものであったことが推測される。頸部の下には、クタキが施されている。全体に肉厚で、砂粒が見られず胎土の質はよい。

他に土器としては、土師製の杯の一部と、提瓶の口縁部と思われるものが出土している。

鉄鎌 (15, 16) (15)は第2主体部の棺外から出土した。茎を欠損しているので全長は不明である。刃部のたて約5cm、幅2.2cm、厚さ2~3mmで、刃部の両側には長さ1.5cm程度のあごがついている。(16)は第2主体部の棺外から出土した。茎の途中を欠損しているので全長は不明である。刃部のたて約4cm、最大幅3.5cm、厚さ2~3cmで、三角形である。あごはついていない。

鉄刀 (17) 茎の一部と先端を欠損しているので、全長は不明である。刃幅3~3.5cm、残部刃渡り約70cmである。さびによる腐蝕が激しい。

鉄刀 (18) 茎先端から切先まで約99cmの直刀で、束の部分には木片が残っている。また、つばも同時に出土した。つば(19)は広幅の涙滴形で、長径9cm、短径7cm、厚さ約3mm程度である。やはり、さびによる腐蝕がはげしい。



第7図 鉄器 (1/5)

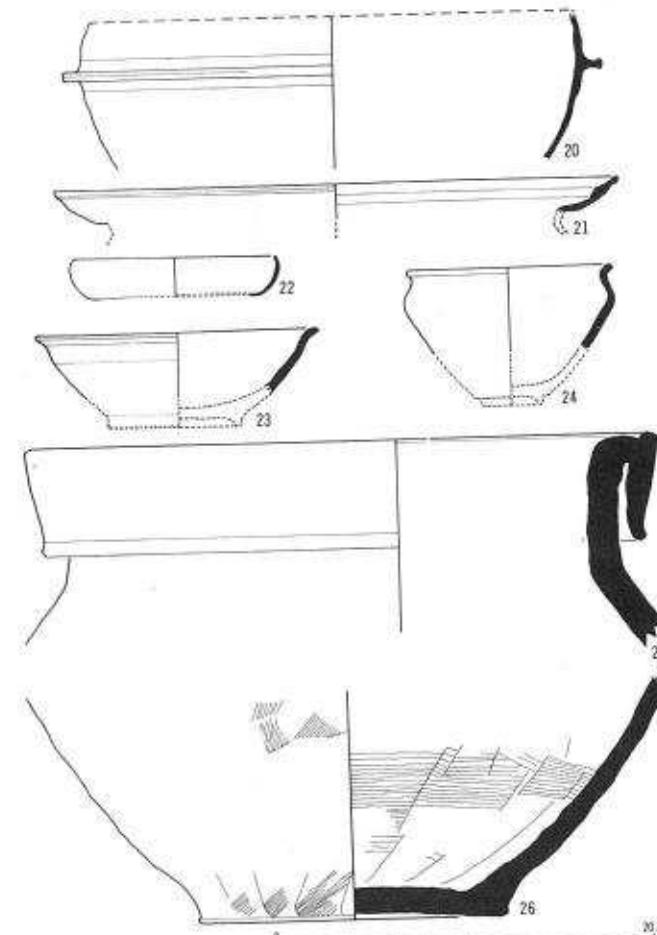
2. 鎌倉・室町時代の遺物

羽釜 (20) 体部の $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。A区北西端より出土したもので、推定口径は25.7cm、高さは不明である。胎土は少量の砂粒を含み、色は内面は灰褐色、外面は赤褐色を呈し、外側は鍔より下の部分全体にススがかかっている。内面は、全面ナデ調整を施し、外面も鍔の上下にはナデ調整を施している。

土師器皿 (22) C区より出土したもので、推定口径10.6cm、高さ2.1cmの小形のものである。器壁は非常に薄く、色は明褐色である。底部は平らで、横ナデされた口縁部は外側にふくらんでいる。尚、これと同様の土師器皿破片が、B区南端部とC区東部より多数出土している。

山茶碗 (23) 全体の $\frac{1}{2}$ 程度の破片で、底部はない。C区より出土したもので、推定口径10.7cm程のものである。胎土は砂粒を含まず、色は灰白色である。口縁部はわずかに外反し、体部は直線的である。また、口縁部端にわずかに施釉がみられる。

天目茶碗 (24) 全体の $\frac{1}{2}$ 程度の破片で底部はない。C区より出土したもので、推定口径10.6cm、高さは不明である。胎土は少量の砂粒を含み、内外面とも鉄釉がかかり、黒色を呈する。



第8図 鎌倉・室町時代の遺物実測図 (1/4)

V おわりに

今回の発掘調査は、当初池村城跡の発掘として位置づけられたが、C区発掘に際して、古墳の遺構が検出され、以後、その古墳の発掘を主たる目的として行った。

さて、城跡としては、今回発掘された部分に於いては何の遺構も検出されなかった。また、発掘した面積も城全体のほんの一部にすぎず、現段階に於いてわかることは、測量図をもとにして考察を加えた程度のことだけである。また、池村城跡に関しては文献にもあまり見られず、はっきりした実態はつかめないが、『明和町史』によると、室町時代大永から天文の初期頃(16世紀前半)北畠氏が⁽¹⁾、その家臣である黒坂主計亮長兵衛に築城させ、城主としたものということである。

⁽¹⁾ なお、C区東側にはまだ城郭が続いており、さらに終戦前までは壕跡も残っていたことであるが、前者はすでに土取りのため削り取られており、後者は戦後開田され、現在は良田となっている。

次に古墳については、その墳丘を中世城がひとつの高台として利用し、築城の時期より人の手がかなり加わっていたため、外見上はもとより、その断面からも、墳形や規模ははっきりしなかった。

内部主体は木棺直葬で、追葬が行われているが、このような石室を持たない後期古墳の形態は、近くの河田古墳群・明星古墳群にも見られ、玉城丘陵に於ける後期古墳のひとつの特徴ともいえる。

土器については、第2主体部出土の杯身(2)が、底部ヘラ切り未調整であり、全体的にやや扁平感を与える点などから、陶邑編年の第2型式第5段階の特徴を有している。第1主体部は第2主体部に先行している点も考慮すると、本墳は、6世紀後半~7世紀前半代のものと推測される。

ところで、本墳の存在する独立丘陵上には、これまでに円墳4基・方墳1基で構成される世古古墳群が知られていた。しかし、それらはすべて丘陵の南北方向に延びた部分にあり、西側に舌状に突き出た部分、つまり池村城跡に当たる部分には古墳は認められていなかった。しかし、今回の調査により、前述のごとく、城が古墳を利用してつくられていることが判明した。城跡にはまだ土壘等盛り上がった部分があり、同様に古墳を取り込んでいる可能性が残されている。また、築城に際し破壊された古墳もあるかもしれない。それらを考慮して、ここでは、世古古墳群としてこの独立丘陵全体をとらえ、この地域に於ける本古墳群の占める位置を若干の私見を混じえて述べてみたい。

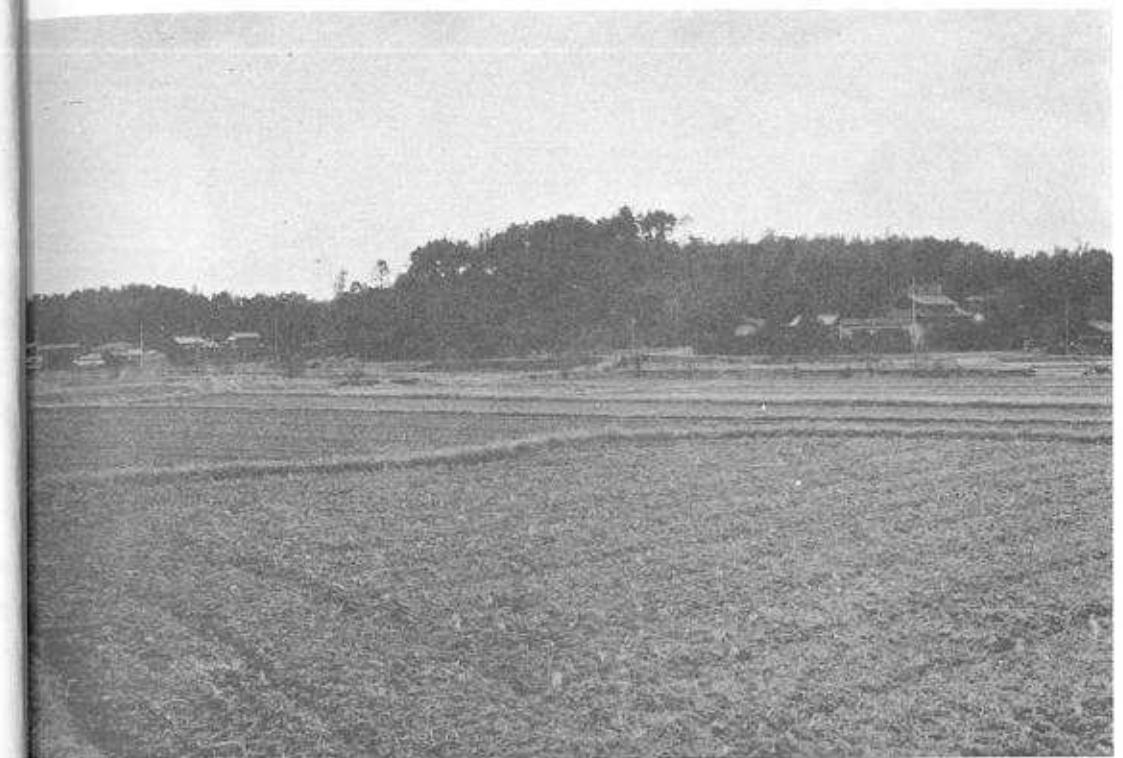
まず、この独立丘陵は玉城丘陵の北東部に位置しているが、5世紀後半ごろより、玉城丘陵で

図版

は北部を中心に強大な勢力が登場し始める。すなわち、高塚1号墳（帆立貝式）、神前山1号墳（帆立貝式）、大塚1号墳（帆立貝式）、天王山19号墳（円墳）等の大規模古墳に代表される勢力である。そして、その勢力は、その後の段階に於いて造営された後期古墳の分布を見るにいたって、神前山1号墳・大塚1号墳・天王山19号墳を含み、河田古墳群等が形成された玉城丘陵北西部の勢力（A）と、斎宮池12号墳、ユブミ2号墳・中山6号墳の前方後円墳を中心に小規模な円墳が造営されている玉城丘陵中央部の勢力（B）に、大きく分けることができる。ところが、この世古墳群や、その東側に続く戸峯古墳群、さらに垣場古墳群の存在する玉城丘陵北東部においては傑出した古墳がなく、かといって、平面的にみて（A）（B）のどちらかに含まれるといふことも言えない。そこで、（A）（B）に於いて初期の大型古墳の被葬者の影響が薄らぎ、玉城丘陵一帯の勢力がある程度分散された時期に、全く新しく台頭してきた小規模な有力者層の新しい墓域として、この北東部丘陵が選ばれたものと考えられないだろうか。

最後に、この玉城丘陵は、県下でも有数の古墳密集地であり、周辺には他の遺跡も多い。しかし山土は良質の赤土であり、いたるところで土取り作業が行われているなど、遺跡は破壊の危機にさらされている。少なくとも、未調査のまま破壊され、永久に姿を消してしまうような遺跡だけはなくしたいものである。

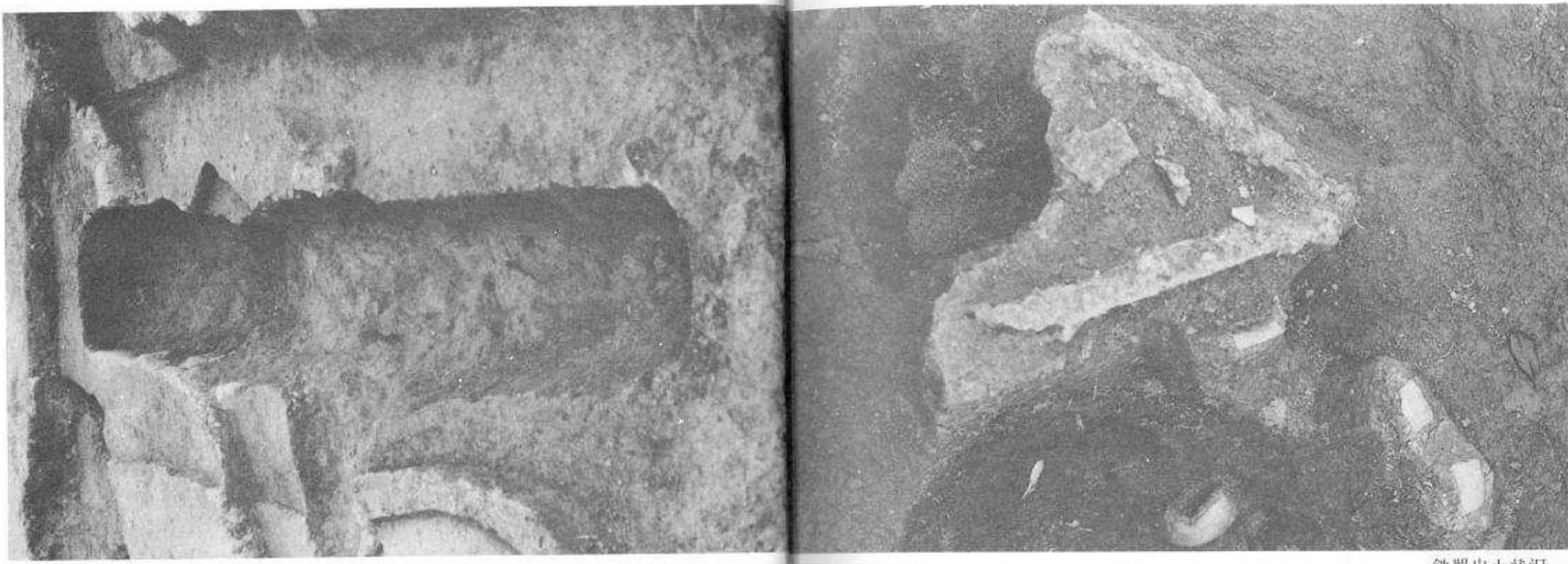
- (1)『明和町史』 明和町史編集委員会 1972
- (2)吉水康夫「河田古墳群発掘調査報告」多気町教育委員会 1974
- (3)奥義次、下村登良男「明星古墳群発掘調査報告」明和町教育委員会 1975
- (4)中村浩他「陶邑」III 大阪府教育委員会 1978
- (5)「中南勢開発地域遺跡地図」三重県教育委員会 1971



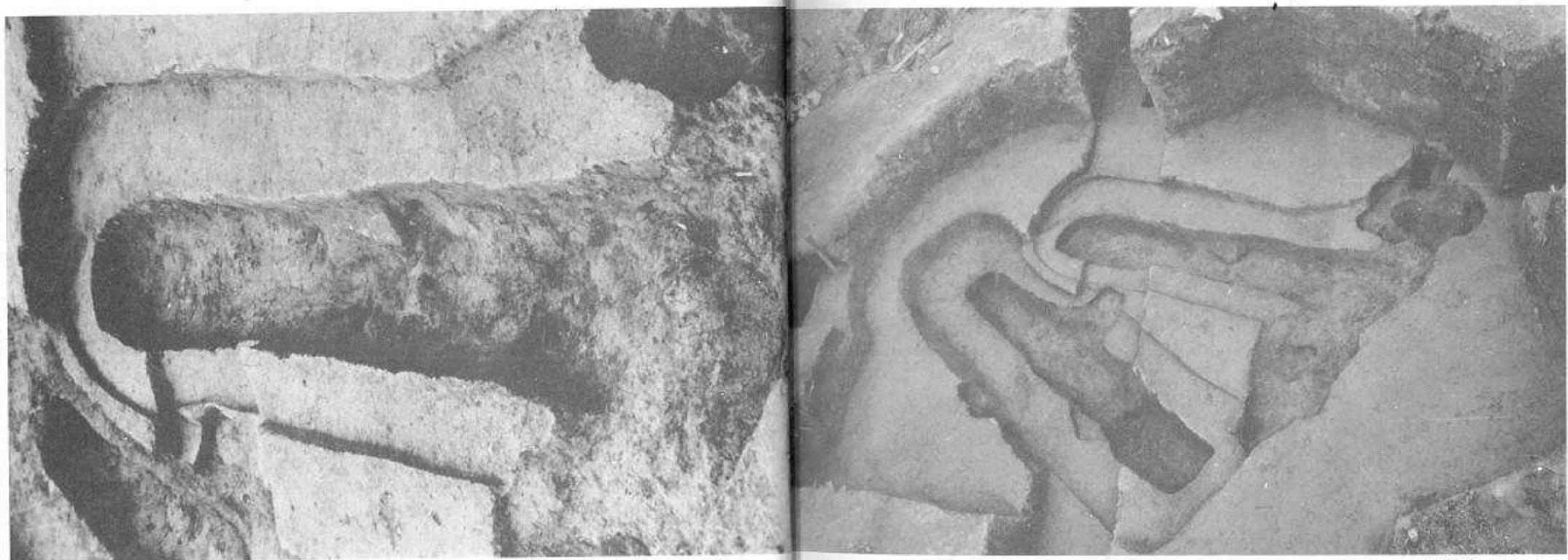
遠 景



近 景

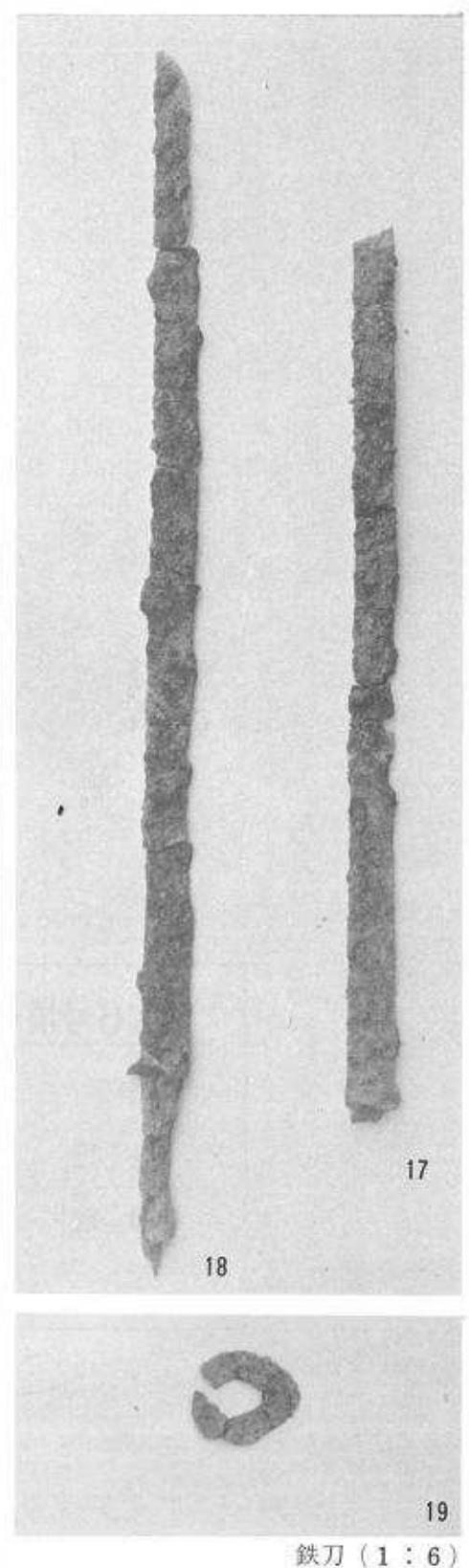


鉄器出土状況



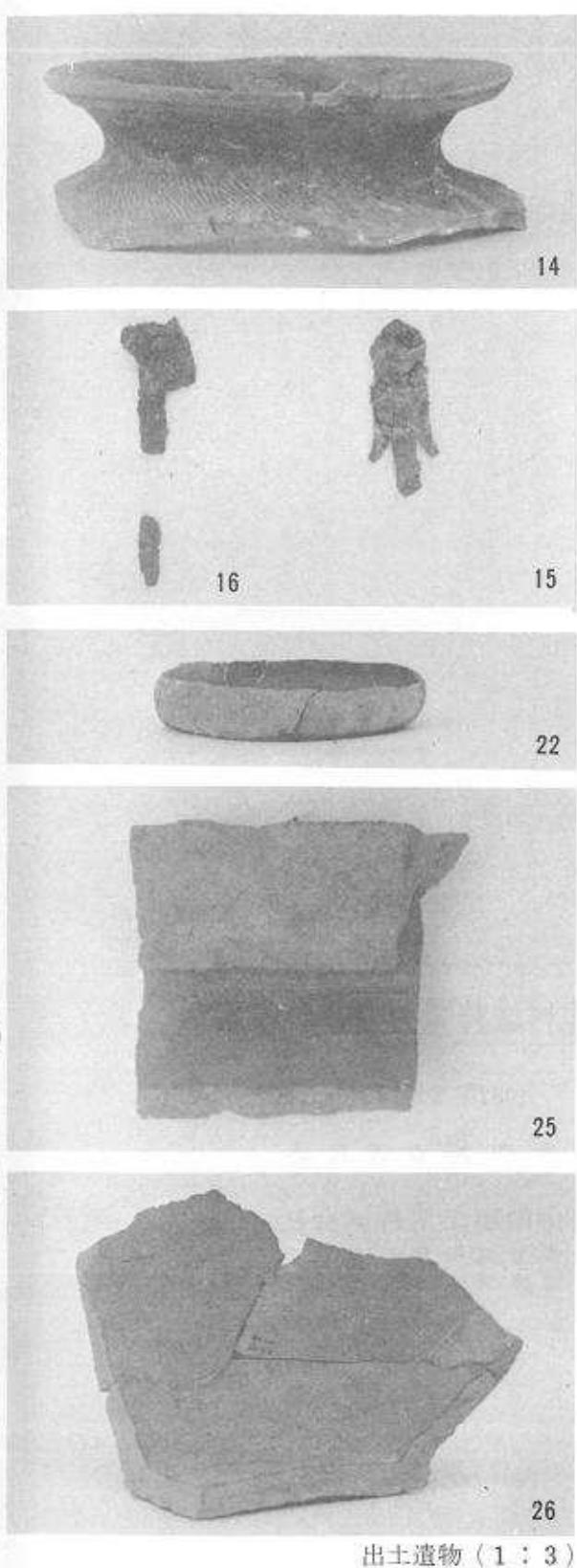
主体部（南から）

圖版五

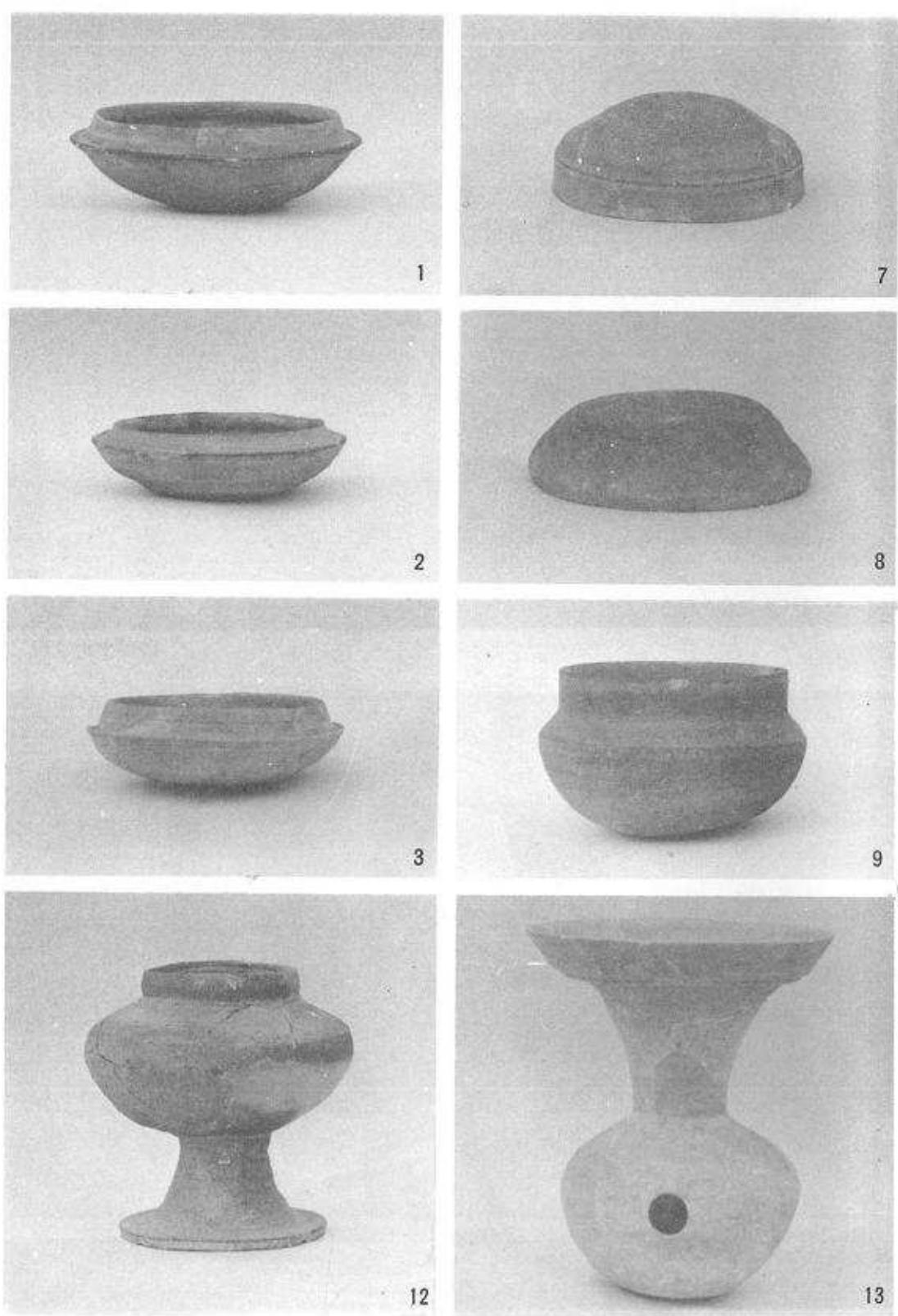


鐵刀 (1 : 6)

圖版四



出土遺物 (1 : 3)



出土遺物 (1 : 3)

世古6号墳・池村城跡発掘調査報告

1982年3月

発行 明和町教育委員会

印刷 門山印刷工業株式会社

多気郡明和町有爾中
電話 明和<05965>②5149(門)